

社会調査というコミュニケーション

岡本裕介

1 「社会調査というコミュニケーション」を論じる背景

社会調査は多くの場合、人(調査者)と人(調査対象者)との間で行なわれるので、ごく一般的な意味でコミュニケーションを伴う⁽¹⁾。それも、言語コミュニケーションに少なからず依存し、正確さが目指される。特に量的調査は「科学的」「実証的」という衣装をまとっている⁽¹⁾ので、正確なコミュニケーションが成り立っている、あるいは少なくともめざすことによって可能になると思われてきた。しかし、1960年代くらいから徐々に、異なる社会調査観が目立ち始めた。

以下では、その流れの中にあるごく最近の社会調査観について、それがどのような見方であるのか、ごく部分的にはあるが触れたいと思う。具体的には、コミュニケーションの中でも特に言語に焦点を当てた見方である。聞き取りや参与観察のような質的調査では、ある程度日常会話に近いコミュニケーションが行なわれているから、言語に依存することはたやすく見てとれる。これに対し、量的調査が言語に限界づけられることが意識されだしたのは、比較的最近のことである。

本題に入る前に、そのような社会調査観の歴史を簡単に振り返っておきたい。その背景には、社会と社会調査との関係の変化がある。

ピーター・ワグナー(1994)によれば、統計学と社会調査は19世紀末から1930年代にかけて隆盛した。このころに、観察された標本の行動や意見が全体(母集団)の傾向をどの程度表わしているのかを探るさまざまな手法が開発され、第2次世界大戦後、選挙における投票行動や消費者の購買行動

の予測，社会保険による保険数理の基礎づけといった場面で利用された。

このころの実証志向の強い社会調査は，社会という表象，連帯主義的な政治哲学，保険と相互に深い関わりをもっていた。それぞれの関連を順に見ていきたい。

まず，社会調査は文字通り社会を対象とする点で，社会という表象を前提としている。それは社会調査が普及する以前の，たとえば政治算術学派の調査と異なる点だった。教区の出生や死亡の傾向を調べたとしても，政治算術学派の調査では，別の何らかの実体や本質と結びつけられることはなかった。これに対し，社会調査では，必ず背後に社会の存在を仮定した。

そして，この社会という表象は，フランソワ・エヴァルド(1986)の言う連帯主義的な思想にとっても不可欠である。連帯主義以前の古典的な自由主義思想では，公領域としての政体(国家)と私領域としての個人という二項図式が一般的だった。この図式では，たとえば労働災害は単に個人の過失と見なされた。しかし，国家と個人の他に，社会という第3の表象が現れると，労働災害の責任は，ミスを余儀なくさせた労働環境，資本主義社会のあり方など，社会にあると考えられるようになる。「すべての不運は社会全体によって受け止められるべきである」と考える連帯主義は，保険の技術と，それを下支える統計学や社会調査と連動して隆盛した。

しかし，1970年代にはこうした福祉国家は危機を迎えた。高度成長を終えて保険制度は縮小を余儀なくされ，国家や社会に対する批判の聲が高まった。そうすると，社会科学の中立性・客観性に疑問が投げかけられるようになった。社会学でも，支配的だった構造機能主義と実証主義が衰退した(小幡正敏 2002, 2007)。

こうした流れに伴い，社会調査も認識枠組みの変更を余儀なくされた。社会調査の背後にある利害関心や権力関係にも目が向けられるようになったほか，調査の方法論も多様化した。量的調査一辺倒とでもいうべき状況が変化し，質的調査も同程度に重視されるようになってきた。

さて，このような流れを踏まえたうえで，量的調査を言語活動として見

るということを考えてみたい。

2 言語活動としての社会調査

調査が他でもなく言語活動であり、したがって言語によって限界づけられることは、これまで多様に論じられてきたが⁽²⁾、もっと手近なところから考えてみよう。計量分析の際のエラボレーションに関連してこの点を述べているのは、佐藤俊樹(2000)⁽³⁾である。

教科書的な知識になるが、エラボレーションの考え方に、ポイントが端的に含まれているので簡単に触れておく。エラボレーションとは、関連する2つの変数に、別の変数(第3変数)を導入して関連を詳しく見る分析を指す。たとえば表1は計量分析のテキストで頻繁に使用される架空例だが、性別という変数と自動車運転中の事故経験という変数に関連があるように見える。データでは、女性よりも男性の方が事故経験が多い。たとえば男性は運転が荒いので事故を起こしやすいから、このようなデータが得られたのではないかと考える。

表1 性別と交通事故との関連
(単位: %)

性別	事故経験あり	事故経験なし	計
男性	44.1 (3112)	55.9 (3958)	100 (7080)
女性	32.4 (2252)	67.6 (4698)	100 (6950)
全体 (人数)	38.3 (5374)	61.7 (8656)	100 (14030)

ザイゼル(1985=2005)の架空データ。

しかしここに走行距離という第3変数を導入して見直すと、全く異なる状況が見えてくる(表2)。性別ごとに見ると、事故経験者の比率は全く同じである(架空例なので、わかりやすく完全に一致するデータになっている)。男

女間で異なるのは走行距離で、要するに男性は女性に比べて自動車の運転機会が多いので、事故にさらされる可能性も上昇するというように読める。

表2 性別・交通事故・走行距離の関連 (単位：%)

性別	走行距離長			走行距離短		
	事故経験あり	事故経験なし	計	事故経験あり	事故経験なし	計
男性	52.0 (2605)	48.0 (2405)	100 (5010)	25.0 (518)	75.0 (1553)	100 (2070)
女性	52.1 (998)	47.9 (917)	100 (1915)	24.9 (1254)	75.1 (3781)	100 (5035)
全体 (人数)	52.0 (3603)	48.0 (3322)	100 (6925)	24.9 (1771)	75.1 (5334)	100 (7105)

ザイゼルの(1985=2005)の架空データ。

さて、このようなエラボレーションを通して焦点になっているのは変数の意味であると、佐藤は述べている。上の例で言えば、エラボレーションの前後で、「性別」「事故経験」という変数の意味は変化しているということになる。具体的にどのように変化したかを記述することは難しいが、走行距離と結びつけて理解するかどうかで、確かに含意は変わってくるだろう。

従来は、エラボレーションについてこのような点が強調されることはなかった。⁽⁴⁾計量分析は、客観的に実在する因果関係を科学的な手法でつきとめるものであり、そのためには変数の意味はできる限り固定されていなければならないと考えられていた。分析に先立って変数を厳密に定義し、調査票を使って得られるデータであれば、ワーディングにも対象者に対する面接の仕方にも注意を払う。しかし佐藤によれば、計量分析はこうしたいわゆる仮説検証型の作業ではなく、分析のなかで変数の意味を反省的にとらえなおし、再発見する作業である。もちろん、解釈の余地があるということは、どうしても解釈できるということではない。「予想しなかった変数間の関連性が新たに見つかった時に、それをふくみこんだ形で変数全体

の再解釈がどこまで総合的にできるか、といったことが計量分析の良し悪しをきめていく」(佐藤 2000: 168)。こうした意味で、計量分析はテキスト解釈や人類学のフィールドワーク、つまり質的調査の分析に似ている。量的調査は、言語活動という点から見て、質的調査や日常生活のそれと本質的に異なるかに思われていたが、むしろ基本的なところで類似性があるということである。

しかし他方、調査が、正確で曖昧さのないコミュニケーションをめざしているという点から見ると、量的調査として最もよく使われる調査票調査のそれはやはり特異であり、しかもある意味で「正確」であることの条件を満たせない仕組みになっているという見方もできる。これを次に示そう。

西阪仰・川島理恵(2007)は、エスノメソドロジー研究独特の視点から、まず調査票調査ではない一般の会話のなかで「曖昧さがない」という状態がどのように達成されるかを論じる。答えは、会話の参加者たちが「相互行為の具体的な展開のなかで、文化に具わった規範的な仕掛けを用いながら協同で成し遂げていく」(西阪・川島 2007)というものである。

西阪・川島は、不妊が主訴の患者と担当医師との会話のトランスクリプト⁽⁵⁾をひく。排卵日が分からないという患者に対し、医師は基礎体温表を見ながら説明している。医師の返答を見ると、5つの可能な完結点がある。

①「低温と高温の境が排卵日」と定義を説明した時点、②「ここです」とグラフ上の例を指した時点、③「タイミングがあってないってということね」と主訴である不妊と関連付けた時点、④グラフ上の別の例を指した時点、⑤「だからしゅって上がったその日の夜でも間に合うの」と、具体的な対処法を示した時点。会話の流れの中で、この5つの候補のいずれの時点でも、返答が完結し、そこで「質問-返答」連鎖が終わっている可能性があった。実際に完結したのは⑤であったが、①～④とそれを分けたのは、候補点のあとに両者がどのような相互行為をしたかであった。たとえば①のあと、患者は「はあー」と表現して感心を表わす。これは①を完結点とするには最低限のもので、同時に医師がさらに続ける機会を与えているか

もしれない両義的なものである。結局、医師は説明を続け、結果的に①は完結点にならなかった。⑤では、医師の発言の内容が対処法の提示で、診療という文脈から見て非常に核心的ではある。しかし、それだけではなく、そのあと患者はずっと前かがみであった姿勢を崩し、上体を立てた。さらに、⑤の医師の発言を言い換えて、自分が理解しているということを明示した。ここでようやく患者と医師の「質問－返答」連鎖は完結する。「曖昧さのない正確な理解」はこのようにして達成される。

会話のトリヴィアルな分析を長々と引用していると思われるかもしれないが、こうした分析を追うことで示しているのは、可能な完結点のいずれの点においても、正確さは十分であるとも言えるし不十分であるとも言えるということである。医師の返答の内容に全く関係なく完結するというわけではないが、内容によってのみ決められるわけでもない。常に「質問－返答」連鎖当事者の相互行為による協同が関わっている。

さてそのように考えるとすると、調査票調査に施されているのは、「不思議な工夫」(西阪・川島 2007:134)と言わざるを得ないだろう。調査でも上に示した例のように「質問－返答」の流れはあるが、原則として1度の質問と回答で終わる。正確さを達成するには必要な、そのあとに続くべき協同の機会が体系的に奪われている。通常、調査票を使った調査では、対象者に対する調査者の働きかけは著しく制限されているからである。その代わりに、調査票が回収されたあとに、その回答に対して働きかけを行なう⁽⁶⁾。しかし、その時点で質問者と返答者の相互行為はすでに終わってしまっている。

このような特異な「質問－返答」連鎖の背後には、それを支えている思想がある。「回答は、回答者の考えの反映・表現であり、(いかに屈折した形であってもそこに反映される)回答者の考えは、質問に先立って回答者の側にある、という思想である。この思想は、何も特定の社会学者だけのものではない。現代社会に生きる多くの人が、あえてそう聞かれれば、自分もそう思うと言いたくなるような、そんな考え方だ」(西阪・川島 2007:134)。

あえて「思想」という言葉が使われているのは、それが決して自明ではなく、むしろ異なる考え方に基づくべきではないかということを示唆しているからである。つまり、医師や調査対象者の回答は、「頭の中に用意されている特定の命題の集合であるというよりも、実際に特定のやり方で行為ができるということのうちに」（西阪・川島 2007：135）あるという考え方である。

3 結びにかえて

社会調査をコミュニケーションから見る例として、前節では、エラーレーションを通した変数の意味の変化、調査票における「曖昧さのない」理解を達成する契機の欠如という2点をあげた。かつての量的調査全盛の時代が去って、このような見方が広まり、そこで起きた変化はどのようなものだろうか。

いくつかあると思われるが、そのうちの1つは調査で見出されるべき「真理」の扱い方であろう。かつて真理は次のように表わせると考えられていたのではないだろうか。真理は客観的に実在するが、多くはノイズに覆われたりしていてとらえることができない。調査の（あるいは科学の）さまざまなプロセスによってノイズを除去していけば、真理に到達できる。

しかし、ここで見たわずかな例からも言えるのは、単に何かを取り除くだけではなく、逆に何かを加えることも実際に行われており、むしろ不可欠であるということである。解釈を加える、協同作業をするという言語活動を通して何かを加えることによって、真理が構成されている。そうすると、真理は絶対的なものではなく、いわば「作られる」という面ももつことになる。これは、調査が科学的な外見を持っているにもかかわらずいかがわしいものであり、存在意義がないということの意味するのだろうか。そうではないだろう。そもそも、先に紹介した諸研究でも繰り返し触れられていることであるが、理解の可能性が複数あるということは、どう

とでも理解できるということではないから、⁽⁷⁾ 実は上のような真理に対する見方はさほど混乱を引き起こすわけではない。むしろ必要なのは、どのようにしてその「真理」に到達したかを自覚して明示し、いつでも再解釈が可能な状態にしておくことである。

注

- (1) 物や出来事を数える社会調査は人と人とのやり取りではないので、「ごく一般的な意味で」コミュニケーションではない。しかし、学術的に言って、コミュニケーションは「人と人」に限られる訳でもないので、実は「すべての社会調査はコミュニケーション」を伴うと言ってしまっても、特に問題はない。
- (2) 岡本裕介(2002)参照。
- (3) この文章は社会学研究法のテキストの1章である。量的調査に対する新しいまなざしは、テキストの中でも指摘されるようになったとも言えるが、ただし、以下に述べるエラボレーションについてそこで指摘されていることは、調査従事者にとって周知であるかという点、そこまでではない。
- (4) エラボレーションは、導入する第3変数の位置づけによって大きく3つのタイプ分けられる。ここにあげた例は「解釈」(interpretation)と呼ばれるタイプで、変数の意味の変化が顕著である。しかし、他のタイプも変数の意味は変化すると見なせる(佐藤 2000: 163)。
- (5) 以下、会話分析特有のトランスクリプト記号は省略して、文字のみ引用する。
- (6) この節の前半でしめしたような計量分析、すなわち変数の解釈、再解釈の連鎖であるが、その完結点もやはり絶対的な完結点ではない。
- (7) エラボレーションによる意味の変化については、「こういふと、すぐ「統計数字なんていくらでも勝手に解釈できるんだ!」と短絡する人がいるが、これもまた「科学性」信仰の裏返しにすぎない。1つの解釈に収束しないということは、いくらでも解釈できるということではない」(佐藤 2000: 168)。「質問-返答」連鎖で「返答」が完結しているかどうか協同で達成されることについては、「さて、このように言ったからといって、質問や返答が本質的に曖昧であってよいわけではない。まして、いつでも修復可能だからといって何でも勝手にやってよいというわけではない」(西阪・川島 2007: 134)。

参考文献

Ewald, François, 1986, *L'État providence*, Paris: Bernard Grasset.

- 西阪仰・川島理恵, 2007, 「曖昧さのない質問を行なうこと — 相互行為のなかの
情報収集」田中耕一・荻野昌弘編, 115-137.
- 小幡正敏, 2002, 「持続可能な社会保障? — エコ・モダン型福祉社会のゆくえ」
『現代思想』30(15), 106-120.
- , 2007, 「保険と調査 — もう一つの社会調査史」田中耕一・荻野昌弘
編, 45-64.
- 岡本裕介, 2002, 「人々を作り上げることと縫合 — 社会的プロセスとしての統
計学」『京都学園大学人間文化学会紀要人間文化研究』8.
- 佐藤俊樹, 2000, 「1枚の図表から — 計量データの読み方・考え方」, 今田高俊
編『社会学研究法・リアリティの捉え方』, 150-170.
- 田中耕一・荻野昌弘編, 2007, 『社会調査と権力 — 〈社会的なもの〉の危機と
社会学』世界思想社.
- Wagner, P., 1994, *A Sociology of Modernity: Liberty and Discipline*, London:
Routledge.
- Zeisel, Hans, 1985, *Say It with Figures*, 6th ed., New York: Harper & Row. (= 佐藤
郁哉訳, 2005, 『数字で語る — 社会統計学入門』新曜社.)